

日本語とスペイン語の指示詞直示用法の理論的分析

Demonstratives in deictic use in Japanese and Spanish

小田 千賀子

1. 導入

1.1 研究の背景

日本語の指示表現は「こ、そ、あ」の3系統の指示体系を持つが、スペイン語の指示詞も同じく“este, ese, aquel”の3系統の指示体系を持つ。そのため、特に第2言語習得の場では、スペイン語の“este, ese, aquel”が、日本語の指示詞の「これ、それ、あれ」に対応して示されることが多い。しかしながら、両言語の指示詞の体系が同じであっても、その仕組みが完全に一致しているとは限らない。

例えば、寺崎 (1999:85) は以下 (1) の例を挙げ、日本語とスペイン語の指示用法のずれを指摘している。

- (1) Y ese muchacho despeinado, ¿por qué sella todos los papeles
and that boy disheveled, why seal-3rd-sg all the papers

que caen en sus manos?

that fall into his hands?

“あの頭がぼさぼさした若者は、なぜ手にした書類全部にスタンプを押しているの。”

(Carido, Eduardo, 1961, Cuando las nubes cambian de nariz, en UH)

上記の例は、聞き手と話し手が同じ視点に立っており、少し離れたところにいる「ぼさぼさの頭の若者」についての会話をしている場面である。スペイン語では [ese] が使用されているのに対し、同じ場面において日本語では、「あのぼさぼさ頭の若者」と「あ」で指示される領域である。

従来の研究におけるスペイン語の指示詞の用法は、(1) の例で示されたスペイン語と日本語の間にある指示用法のずれについては言及されず、3体系をそのまま対応させて説明されることが一般的であり、その本質的な特質に関する統一の見解はまだなされていない。

1.2 研究の目的

本研究は、(1) に代表される指示詞の直示用法における日本語とスペイン語のずれに注目し、スペイン語の指示詞の本質的な特徴を明らかにすることを目的とする。

この問題に取り組むにあたり、主に Hoji et al. (2003) で用いられた日本語の指示詞の統語的構造特質を示した理論を本研究の理論的根拠とする。同研究で提示された理論的説明を基に、スペイン語の指示詞が本質的にどのような構造的特質を持つかを示したい。そこで得られた結果を検証し、Hoji et al. (2003) で示された日本語の指示詞の構造的特質との一致点、相違点を示唆したうえで、スペイン語の指示詞の直示用法を理論的に説明することを試みる。

本稿の構成は以下の通りである。

第2節では、日本語の指示詞とスペイン語の指示詞の先行研究を紹介する。まず、ヒトの言語機能にある普遍的な構造特質が、「近」「遠」というヒトの認知機能の特質と密接に関わるとする Hoji et al. (2003) の主張を取り上げ、日本語の指示詞ソが、構造的に指示詞ア、コとは異なるという統語的アプローチによる研究を概説する。次に、スペイン語の指示詞の直示用法に関する先行研究を概観し、用法の記述に一貫性がないこと、また、理論的研究に基づく記述に欠けていることを指摘する。第3節では、日本

語の指示詞とスペイン語の指示詞の共通点と相違点を示し、スペイン語の *ese* 系統の指示詞が問題となることを述べる。第4節では、2.1節で概説した Hoji et al. (2003) の日本語の指示詞の統語的アプローチの理論に基づき、スペイン語の指示詞の用法を決定づける原理が何かを明らかにすべく実証実験を行う。同実験は、主に「聞き手」の存在がスペイン語の *ese* 系統の用法に必須の要素であるかどうかを明らかにすることを目的に行われ、Hoji et al. (2003) の理論を基に検証する。第5節では、第4節の実証実験で示された結果から、スペイン語の指示詞の用法を決定づけると考えられる原理に基づいて、スペイン語の指示詞の現象に理論的説明を与えることを試みる。

2. 先行研究

2.1. Hoji et al. (2003)

指示詞の用法は、伝統的に談話場面における「話し手」と「聞き手」「指示対象」といった語用的要因に基づき説明される。日本語の指示詞の用法は、「話し手」「聞き手」「指示対象」の間にある距離的關係によって「こ、そ、あ」の3系統の指示体系を持つと捉えられることが一般的である。

(2) は、Matsushita (1978) の日本語の直示用法の記述である。

- (2) The standard characterization of the deictic uses of *ko/so/a*-NPs :
- a. A *ko*-NP is used for referring to something near the speaker.
 - b. A *so*-NP is used for referring to something closer to the hearer.
 - c. An *a*-NP is used for referring to something at a distance from both the speaker and the hearer.

(2) の指示詞の用法の観察の語用論的記述一般化や、意味論的アプロー

手による指示用法の言及がそれまでの先行研究の主流であったが、Hoji (1991) は、日本語の「ソ」のみが非直示用法で数量詞に束縛された解釈（いわゆる連動（束縛変項照応 (Bound Variable Anaphora)）解釈）が可能であるという指示詞の統語的特質を示した。本稿では、この日本語の指示詞の構造的性質が、ヒトの言語機能に組み込まれた自律的で普遍的な文法 (UG) に基づくとする Hoji et al. (2003:15) の主張を論拠とし、スペイン語の指示詞にも同じ指示詞の原理が働いているという仮定のもと議論を進める。スペイン語の指示詞の直示用法を理論的に分析し記述するため、次節以降は、主に Hoji et al. (2003) の日本語の指示用法の統語的アプローチによる議論を概説し、本研究の導入とする。

2.1.1. a-NPs と ko-NPs

Hoji et al. (2003) は、日本語の指示詞の「こ、そ、あ」は、「こ」は距離が「近」いものを指す、「あ」は距離が「遠」いものを指すというヒトの認知の特性を基に表出され、「こ」には [Proximal]、「あ」には [Distal] という性質がそれぞれの語彙に付与されるとしている。

- (3) Ko-NPs and a-NP¹s are marked, linguistically, as [Proximal] and [Distal], respectively, and must correspond to what the speaker construes as proximal and distal, respectively².

(Hoji et al 2003:(34))

(3) は、ko-NPs（「こ」で指示された名詞句）が言語的に [Proximal] の形式特性（素性）を持つ指示詞であり、a-NPs（「あ」で指示された名詞句）が [Distal] の形式特性を持つことを仮定し、ヒトの認知により「近」と判断されたものは [Proximal] の素性を持つ ko-NPs が語彙として選択され、

1 以降、「こ、そ、あ」で示された名詞句を、それぞれ ko-NPs, so-NPs, a-NPs と呼ぶ。

2 この指示詞が持つ性質は、ヒトの言語機能に組み込まれた普遍的概念のうち、視覚、聴覚、(時)空間の「近」「遠」の認知によってもたらされ、ヒトの言語において共通の認知のメカニズムが働いていると考えられる。

「遠」と判断されたものは、[Distal]の素性を持つ a-NPs が語彙として選択される³ことを述べている。

(4)の ko-NPs、a-NPs の指示詞の用法には、「近」「遠」と話し手が認知した対象物との物理的な距離が関わる。

- (4) a. [10メートル先を指さしながら]
 { あ /?? こ } の人はアメリカ人です。
 b. [話し手の手の届く範囲にいる人を指さしながら]
 { こ /# あ } の人はアメリカ人です。

(Hoji et al 2003:(37))

(4a)では、話し手が対象物を「遠」と認知した場合、a- という語彙が選択される。a- で示された名詞句 (a-NPs) は、[-Proximal] という言語的特質を持つ。一方で、(4b) は話し手が対象物を「近」と認知しているため ko- という語彙が選択され (ko-NPs)、[+Proximal] の言語的特質を持つ。この例では、話し手と対象物の間にある実際の距離と、指示詞として表出した語彙に差異はない。

一方で、話し手の認知になんらかの非文法的要因が影響すると、実際の距離にかかわらず、話し手の主観によって ko- でも a- も表すことが可能になる場合 (5) がある。

- (5) (状況：話し手が10メートル先の人物が誰かに関して聞き手に説明する場面)
 { あ / こ } の男は [(わしが今度アメリカから連れてきた) アメリカ人] じゃ。

(Hoji et al. 2003:(38))

(5)の場面では、話し手と話し手が言及している人物の間にある距離は

3 以降 [Proximal][Distal] をそれぞれ [+Proximal][-Proximal] と表記する。

変わらないが、何らかの認知的な要因⁴が作用し a- でも ko- でも適切になる。同じように、(6) の例においても離れた場所にあるものを a- でも ko- でも指し示すことができる⁵。

(6) (状況：マンションの下に停めた新車を2階の部屋の窓から指さして、隣にいる友達に自慢する。)

{あ/こ} の車ね、先月買ったばかりの新車なの。

(5)(6) ともに、話し手は主観的に話し手から対象物までの距離特質 [Distal/Proximal] を決定できる。話し手と指示対象の物理的な距離は変わらないが、話し手の主観により「近」と認知されたものには、[+Proximal] の言語特質を持つ ko-NP の言語表現が選択され、「遠」と認知されたものには、[-Proximal] の言語特質を持つ a-NPs の言語表現が選択される。このように、話し手が「近」と解釈するか、「遠」と解釈するかは、話し手が世界をどう見ているのかによって変わる。

しかしながら、話し手が望めば世界のすべてを「近」もしくは「遠」と判断することができるのかというところではなく、「近」としては捉えやすいが「遠」では捉えにくいことが指摘されている⁶。

(7) a. Whenever an object can be construed as non-proximal, it is

4 「遠」「近」の認知に影響を与える非文法的要因に関しては、田窪 (2010:309-310) を参照。

5 (6) の例では、a-NPs, ko-NPs のどちらでも使えるが、遠いものを指すときに ko-NPs を使用する場合、事前に聞き手に対してそのものに関する情報を与え、そのものを認知させる必要がある。

6 以下、原文から引用する。

‘It seems that the speaker does not have as free an option of taking everything in the world to be distal as s/he does of taking everything in the world proximal. We have the option of referring to a star in the sky as ko-no hosi ‘this star’ or a-no hosi ‘that star’, but we do not seem to have the option of referring to a pen that we are holding in our hands as ko-no pen ‘this pen’ or a-no pen ‘that pen’. It seems that we must refer to it as ko-no pen ‘this pen’, no matter how we try to adjust the way we view the world.’ (Hoji et al. (2003:13))

also possible to construe it as proximal.

- b. It is not the case that whenever an object can be construed as proximal, it is also possible to construe it as non-proximal.

(Hoji et al. (2000:15(91)))

Hoji et al. (2000:15) は、話し手による「遠」「近」の認知は主観的であるものの、遠くにあるものを近くに引き寄せて捉えることは可能であるが、近くにある物を遠くに捉えることは難しいため、そこには何らかの制約があることを指摘し、この心理的操作を condition on proximal construal (COP)⁷ と呼んでいる。

2.1.2. So-NPs

前節では日本語の ko-NPs と a-NPs の直示用法に関する Hoji et al. (2003) の主張を概説したが、本節では日本語のもう一つの指示詞である so-NPs の直示用法の特質に関する同研究の要点を紹介する。

Hoji et al. (2000:18) は、In a way, one can reasonably say that ko and a are ‘demonstrative’ prefixes, but so is not, taking the [+/-Proximal] marking to be the defining property of ‘demonstratives’. と述べ、so-NPs が [± Proximal] の言語特質を持たないことを指摘している。例えば、前節で挙げた (5) (6) の例の場面では、so-NPs は決して使用できない。so-NPs が [± Proximal] の言語特質を持たないので、so-NPs の用法にはヒトの距離の認知が働いていない。

7 (7) の COP の例として Hoji et al. (2000:15(92)) は (7a) に以下 a. の例、(7b) に以下 b. の例をあげている。

a. An example illustrating (91a(=7a)):

Looking at a star in the sky, “Ano hosi-wa … “ or “Kono hosi-wa …”

b. An example illustrating (91b(=7b)):

Holding a pen in front of the eyes, moving it back and forth, and looking at it, “Kono pen wa …” but “#Ano pen-wa …”

日本語の so-NPs が使用される領域には「聞き手の存在」が不可欠であることが広く知られており（松下 1978（出版は1930）、黒田 1979 など）、Hoji et al. (2003) においても、so-NPs の使用場面に「聞き手の存在」がかかわっていることを、(8) (9) の例を挙げ示している⁸。

(8) A tyrant is sitting in a white chair at one end of a room in his palace, looking at a red chair placed at the other end of the room. He is all by himself.

(Hoji et al. (2003:(48)))

(8) は、暴君は部屋にたった一人でいる状況で、部屋の反対側にある赤い椅子を指さしているが、暴君による対象物との距離の認知的判断により、ko-no もしくは a-no として赤い椅子を指示することができる。ところが、そこに家臣が現れ、赤い椅子に座っていた場合、次の (9) ように a-no は使えなくなる。

(9) (よく聞け。){この/その/*あの} 椅子はなあ、わしが北京から持って帰ったのじゃ。

(Hoji et al. (2003:(49)))

聞き手のそばにあるものを a- で指し示すことが不可能なのは、以下の例でも確認できる。

(10) a. (状況：話し手が座る机の隣には古い冷蔵庫があり、近々捨てる予定である。そこでひとり呟く。)

{こ/*そ/*あ} の冷蔵庫、明日の粗大ごみに出せるかな。

b. (状況：そこに、聞き手がやってきて、冷蔵庫を開いて飲み物を

⁸ ただし、「例外として、近くでも遠くでもない距離にある要素を指すときに、『そこ』や『その辺』などが場所の名詞句に関して使われる」ことも指摘されている（田窪 (2010:227)）。

取り出そうとしたので質問する。)

{こ / そ / * あ} の冷蔵庫、明日の粗大ゴミに出せると思う？

対象物を指示するときの話し手による「遠」「近」の認知には、様々な非文法的要因がかかわることは、Hoji et al. (2003) や田窪 (2010) で示されている通りである。非文法的要因の一つである「聞き手」の存在は、話し手と対象物の間にある主観的距離の認知的判断に基づく指示詞の選択に影響を与え、(9) の例のように、話し手から遠くにあるイスであっても「あのイス」とは言えなくなる。

Hoji et al. (2003) では、「聞き手」の存在によって話し手の認知が変化することを「二つの視点 (two 'point of view')」の競合の状態にあるとしている。「二つの視点(two 'point of view')」の競合は、話し手が「遠」と認知しているものに対して、聞き手が「近」と認知しているだろうと話し手が判断した場合に生じ、この競合が生じると、a-no isuが容認できなくなる状況のことを言う。このtwo 'point of view'の競合が起こるとき、話し手の唯一の選択肢としてあるのが so-NPs であると述べている。

- (11) The speaker construes the relevant object (=the red chair) as distal, and the speaker thinks that the hearer would construe the relevant object (=the red chair) as proximal.

(Hoji et al. (2003: (50)))

従って、so-NPs は、話し手と聞き手の視点の競合により、話し手が「遠」とも「近」とも選択できない場合の手段として使われ、[± Proximal]の言語的特質をもたない。また、so-NPs には視点の競合を引き起こす要因となる「聞き手の存在」が必須条件であるので、「聞き手の存在」が想定されない独り言の場面では現れないことが、Hoji et al. (2003) による so-NPs の直示用法の結論である。

- (12) The only option s/he has is then to express his/her cognitive understanding of the object in question as neither proximal nor distal, and the speaker can do this with a so-NP. So-NPs, by hypothesis, are not marked as either [Distal] or [Proximal]. (中略) Deictic so-NPs never appear in a monologue. In a monologue, no conflicts of the sort under discussion arise.

(Hoji et al. (2003: 13))

「視点の競合」を裏付ける例として、(13) のような独り言の場面においては、so-NPs の使用が不可能であることが挙げられる。

- (13) (状況：男が一人で寝ている。朝、目覚めて天井を見ると、昨日まではなかったはずのシミが天井にできているのに気づき、とっさにつぶやいた。)

{この /* その / あの} シミはなんだ？

(片岡個人談話：2022. 12. 20)

「聞き手の存在」によって生じる「視点の競合」のない上記の場面において、so-NPs の使用は不可能であり、これは筆者を含む、片岡、菊田（神奈川大学外国語学部スペイン語学科）の日本語母語話者が認めている。

2.1.3. [± Proximal] と [± D]

本稿は、指示詞の直示用法を扱うため、非直示場面における名詞句の照応用法に関わる構造特質についての詳細は扱わないが、スペイン語の指示詞の直示用法の理論分析を進めるにあたり、必要な概念として導入する [± D] の概説をする。

Ueyama (1998) は、名詞句を以下の3つのタイプに分類し、so-NPs に対して a-NPs と ko-NPs は異なる構造特質を持つことを示した。

- (14) a. D-indexed NPs (e. g. John)
 b. 0-indexed NPs (e. g. he)
 c. I-indexed NPs (e. g. [that student])

D-indexed NP とは [+D] の言語的特質を持つ名詞句のことを指す。[+D] [-D] とは、その名詞句自体が本質的に独自の指示を持つ [+D] と、指示を持たない [-D] のことを示す。(14a) の例の John は、その名詞句自体が John という個体を指すので [+D] の指標を持つ。従って、D-indexed NP の John はその意味解釈のための先行詞のようなものは不要である。一方で、(14b) と (14c) の例にある he と that student は、名詞句自体が独自の指示を持たないため、その意味解釈に先行詞のようなものが必要になる。このような指示を持たない名詞句は [-D] の言語特性を持つ⁹。

- (15) a. D-indexed NPs do not require a linguistic antecedent.
 b. 0-indexed and I-indexed NPs require a linguistic antecedent.

(Hoji et al. (2003: (10)))

(15) で示された指示詞の特徴は (16) (17) の例文で確認できる。

9 so-NPs と a-NPs の非直示場面における用法の違いは、文脈上に先行詞の役割をもつ言語表現がある場合に限り、意味的、語用的な側面から説明できる。話し手が直接的な経験を通してその物を知っていれば a-NPs が選択され、そうでなければ so-NPs が選択される。また、進行中の会話を軸に時間的な近さを基準として、指し示す事柄(直接経験)の時間的距離が近ければ ko-NPs、遠ければ a-NPs が選択される(Takubo(2019:31-32))。ただし、a-NPs と so-NPs には構造上の違いがある。Hoji et al. (2003) は、数量詞に依存する解釈(0-indexed NP: 数量詞との構造関係に依存して指示を決める、I-indexed NP: 先行する数量詞との先行関係に依存して指示を決める)ができるのは、独自に指示を持たない so-NPs だけであることを示し、名詞句自体が指示を持つ a-NPs は先行詞に束縛された解釈ができないことを議論した。非直示用法の so-NPs は独自に指示を持たず、その解釈には言語的先行詞が必要であるため、so-NPs の選択に物理的距離の近さは関係していない。このことは直示用法の so-NPs が、[± Proximal] の言語的特質を持たない指示詞であることと並行していると考えることができる。

(16) (状況：探偵が一人の男を探している。探偵はどういうわけかその男がとある部屋に隠れているに違いないと信じている。探偵は部屋に入り込み、その場の人々に尋ねた。)

[あいつ /# そいつ] はどこだ？

(based on Ueyama 1998: section 4.2(10)&(20), Hoji et al. (2003:(12))

(17) (状況：誰かが電話をかけてきたことを、妻が夫に伝えた。夫はそれが誰かわからない。夫は妻に聞いた。)

[そいつ /# あいつ] はなんて言ってた？

(based on Ueyama 1998: section 4.2(16)&(23), Hoji et al. (2003:(13))

(16) の例の非直示の場面では、話し手が直接経験によって知っていることを a-NPs で指示する。従って a-NPs の使用場面においては文脈上に先行詞は必要でない¹⁰。一方で、so-NPs は何らかの先行詞の役割を果たす名詞句が文脈上必要であるが、そのような名詞句はこの場面には存在しないため不適切である。(17) の場面では、「妻が言及している誰か」が文脈上先行詞のような役割を持つので so-NPs で表すことができるが、話し手はその人物を直接的に知らないので a-NPs の使用はできない。

(18) は、(16) の例で、a-NPs には先行詞が不要であることと、(17) の例で so-NPs には先行詞が必要であるという特質を、Ueyama(1998) の(14) の名詞句の分類にそれぞれ当てはめたものである。

(18) a. A-NPs are D-indexed.

b. So-NPs are either I-indexed or 0-indexed.

10 以下原文を引用する。

D-indexed NPs are the NPs which are to be understood in connection with an individual which is known to the speaker by direct experience, and the relevant connection is established independently of other NPs.

(Hoji et al. (2003:(11)))

so-NPs は 0-indexed NP もしくは I-indexed NP であることから [-D] の言語的特質を持つ名詞句であり、a-NPs は D-indexed NPs であることから [+D] の言語的特質を持つ名詞句である¹¹。

(12) では、so-NPs は [± Proximal] を持たないことが指摘されているが、Hoji et al. (2003:15) では、日本語の指示詞の非直示用法で示された (18) の [± D] の言語的特質と、[± Proximal] の言語的特質を関連づけて考えることが妥当であることが述べられている。

(19) It thus seems plausible that a linguistic object is marked
[Proximal] or [Distal] only if it is D-indexed..

(Hoji et al. (2003:15))

(19) は、[+D] である D-indexed NPs の言語形式となる指示詞のみが [± Proximal] の言語的特質を持つことから、[-D] である I-indexed NPs と 0-indexed NPs の言語形式となる指示詞 (so-NPs) が [± Proximal] の言語的特質を持つことができないことを含意している。

11 非直示用法の so-NPs が [-D] の言語特質を持ち、その解釈に先行詞を必要とするのであれば、直示用法の so-NPs も並行して [-D] の言語特質を持つことが考えられ、その場合の言語的先行詞のようなものが必要になる。

Hoji et al. (2003:13) では、直示場面において先行詞のような役割を持つのが、話し手と指示対象との “visual contact” であると述べている。

...so-NPs are either I-indexed or 0-indexed, and as the result, need a linguistic antecedent. We suggest that a marked operation creates, on the basis of ‘visual contact’ with an object, what corresponds to a linguistic expression that can serve as an antecedent for an I-indexed so-NP and that this is what underlies the deictic use of so-NPs.

Hoji et al. (2003:13)

Hoji et al. (2003:15) では、話し手と指示対象の “visual contact” が視覚的に先行詞のような役割を担うことと、「聞き手の存在」により発生する視点の競合が、直示用法で so-NPs が使用できる要因であると述べている。

上記の議論により、Hoji et al. (2003) は以下 (20) (21) の結論を導き出した。

(20) Both the deictic and non-deictic uses of the demonstratives in modern Japanese can be described on the basis of their linguistic characterization as given in (57(=21)).

- (21) a. A ko-NP must be D-indexed; and it is marked as [Proximal].
b. A so-NP cannot be D-indexed (and it is neither [Proximal] nor [Distal]).
c. An a-NP must be D-indexed; and it is marked as [Distal].

(Hoji et al. (2003:(57)))

Takubo(2019:44) は、上記の Hoji et al. (2003)、Ueyama(1998) などの先行研究から、日本語の指示体系を (22) のように結論付けている。

- (22) Unlike traditional treatments of Japanese demonstratives ko- so- and a- do not constitute a tripartite system, but rather a binary system: ko- and a-, which are [+D], capable of independent reference, on the one hand and so-, which is [-D], incapable of independent reference, on the other.

日本語の so-NPs は形態・音韻論的な区分では指示詞のクラスに入るが、[± Proximal] という言語的特質を持たないことから本質的には指示詞として扱えない。従って日本語の指示体系は 2 系統であるという Takubo(2019:44) の結論は、ヒトがもつ「近」「遠」の距離に基づく普遍的な認知機能を反映したものであるといえる。

2.2. スペイン語の指示詞の直示用法

スペイン語の指示詞の用法に関する先行研究は、現象記述にとどまり、統一の見解は示されていない。また理論に基づいた分析もいまだ議論されていない部分である。

スペイン語の指示詞の用法に関する様々な先行研究や文法書の説明は、主に中称の指示詞と呼ばれる *ese* 系統の用法に関する説明に統一した見解が示されていない。特に日本で出版されている文法書や教科書では、スペイン語の指示詞が、話し手と対象物との距離を基準に使い分けされている説明（西村 2014:46、上田 2017:106-107¹²）がある一方で、スペイン語の *ese* 系統の指示詞においても、対象物がより聞き手に近い時に用いられるという説明（寺崎 1999:85、西川 2014:135¹³）もある。

太田ほか（2000:4）は、「スペイン語の指示語 3 称は、伝統的に人称代名詞の『人称』概念と並行して考えられてきたきらいがあるが（中略）、聞き手の存在が日本語の場合のように顧慮されておらず、『指示語を使って相手側であることを積極的に表すときに中称が充てられる』程度で、基底空間の 3 分割原理に依っている。」とし、「聞き手」の要素がスペイン語の指示体系に与える影響について触れている。

筆者の手元にある西西辞書や RAE-GDLE (*Gramática Descriptiva de la Lengua Española*) では、直示用法の *ese* 系統が指示する領域に「聞き手 (*interlocutor*)」の存在があることに触れている。RAE-GDLE (p940-14.3.2.1.) は、スペイン語の指示代名詞の直示用法に関して (23) のよう

12 以下、原文から引用する。

空間上では、話し手のいる位置からの距離、時間上では、話し手がいる現在からの距離が基準となり、3段階（近称・中称・遠称）で示されます。西村（2014:46）

este は話し手のまわりにあるもの、*ese* は話し手から少し離れたところにあるもの、*aquel* は話し手から遠く離れた場所にあるものを指します。上田（2017:106-107）

13 指示詞の代表的な用法である直示的な（発話の場面の中にあるものを指す）場合、話し手の近くにあるものは *este*、聞き手の近くにあるものは *ese*、両者から遠いものは *aquel* 系列で指示される。（寺崎 1999:85）

空間的に、話し手から近いものが近称、聞き手に近いものが中称、両者から離れているものが遠称となる。（西川 2014:135）

に特徴付けている。

- (23) “En cuanto al tipo de información que transmiten, los pronombres demostrativos son unidades personales y locativos simultáneamente (中略) este expresa cercanía, ese indica un grado intermedio entre cercanía y lejanía y *aquel* implica lejanía en relación con la localización del hablante.”
“Especialmente en algunos casos de deixis ad oculos, el demostrativo *este* (y el advverbio locativo *aquí*) identifican el lugar en el que se encuentra el hablante, *ese* (y *ahí*) se refieren al lugar donde se halla el interlocutor y *aquel* (y *allí*) apuntan a localizaciones distintas de las ocupadas por el hablante o el interlocutor.”

(仮訳)

“伝達する情報のタイプに関して、指示代名詞は人称（を示す）単位であると同時に、場所（を指す）単位でもある（中略）esteは「近」を示し、eseは「近」と「遠」の中間を示し、*aquel*は話し手の場所から「遠」を意味する” “特に目の前の直示用法のいくつかのケースでは、指示代名詞 *este*（と位置を表す副詞 *aquí*）は話し手がいる場所を特定し、*ese* (*ahí*) は聞き手がいる場所を指し、*aquel* (*allí*) は話し手もしくは聞き手が占める場所以外の場所を指し示す。”

また、Real Academia Española(<https://www.rae.es/ese>) Diccionario de la lengua españolaにおいては、*ese* 系統の直示用法に関して、聞き手により近いものを指し示すという説明があることから、日本語の「そ」系統の直示用法と同様の説明がされている。

- (24) 1. adj. dem. Que está cerca de la persona con quien se habla.
Dame ese lápiz, por favor. U. t. pospuesto. No cierren la

puerta esa.

4. pron. dem. m., f. y n. El que o lo que está cerca de la persona con quien se habla. Dame ese, por favor.

(仮訳)

1. 指示形容詞：(話し手が) 話す相手の近くにあるもの (を指す)。
 (例) その鉛筆をください。(後置用法の例) その扉を閉めないでください。
4. 指示代名詞：(話し手が) 話す相手の近くにある物、人 (を指す)。
 (例) それを取ってください。

中級スペイン文法 (2009:200-201) では、スペイン語の指示詞の一般的な用法として、(空間的な) 人・物の指示範囲を (25) のように定めている。

- (25) 話し手の所有物や話し手に直接かかわる物は近称、話し手の近くにある物や聞き手の所有物・聞き手に直接かかわる物が中称、話し手からはるか遠くにあるものは遠称の指示詞で示される。

(中級スペイン文法 (2009:200-201))

このように、従来のスペイン語の指示詞の研究では、理論に基づいた分析はされておらず、現象観察に基づいて指示詞の用法が記述されるのが一般的である。

3. 日本語の指示詞とスペイン語の指示詞の共通点と相違点

指示詞の直示用法の談話場面が、「話し手」「聞き手」「対象物」の要素で構成され、「話し手」による主観的な「近」「遠」の「距離」の認知に対応する指示詞が選択されていることは、どの言語においても共通である。英語や中国語をはじめ多くの言語の指示詞が、近称・遠称の2系統で示されるが、それは「近」「遠」というヒトが持つ普遍的な認知的概念によって表出する指示詞が、それぞれ「話し手に近いものを指す」または「話し

手から遠いものを指す」という共通の制約のもとに、ヒトの普遍的な距離に基づく認知機能を直に反映させたものであるといえる。

一方で、3系統の指示体系を持つスペイン語と日本語は、基本的に話し手から「近」と認知されたものは、[+Proximal]の言語的特質を持つ este 系統と ko-NPs の指示詞として語彙的に表され、他方、「遠」と認知されたものは、[-Proximal]の言語的特質を持つ aquel 系統と a-NPs の指示詞として表出する。このことは、先行研究による現象記述からも、指示詞の本質的な性質からも明らかであり、両言語間において共通の認知が働いている部分である。

問題となるのは、いわゆる「中称」と呼ばれる指示詞である。金水・田窪 (1992 p.142-143) は、このいわゆる「中称」と呼ばれる指示詞が存在する言語は、「それぞれ微妙に、また大層異なっている。またその言語内の体系においても、中称の指示詞はいわくいいがたい役割を担っている場合が多いようである。」と述べている。

日本語の so-NPs は、前節で概説した先行研究の主張により、指示表現自体が指示を持たない [-D] の構造的性質を持ち、[± Proximal] の言語的特質を持たないことが示されている。直示的談話場面で so-NPs が使用されるには、「視点の競合」を引き起こす「聞き手の存在」が必須の要因であることから、ヒトの「距離」の認知により表出する指示詞ではないことは前章で述べた通りである。

それでは、スペイン語の ese 系統の指示詞はどのような性質を持つのか。指示詞の直示用法の談話場面が、「話し手」「聞き手」「対象物」の要素で構成され、「話し手」による主観的な「距離」の認知に対応する指示詞が選択されているという事実から、その特質が「近」と「遠」の間という曖昧な距離を指す「中称」である可能性と、日本語の so-NPs のように、話し手からの距離には依らない「聞き手の存在」により制限された用法である可能性があると考えられる。

次節では、スペイン語の ese 系統の指示詞の直示用法において「聞き手の存在」が必須要素であるか否かを調べ、ese 系統の指示詞が「聞き手の

存在」によって出現しているのか、そうでなければ「距離」を基準として表出するのかを実証実験を通して検証したい。

4. 実証実験と結果

4.1. 実験の目的

これまでの議論から、実証実験で検証する仮説 (26) を立てる。

- (26) スペイン語の ese 系統の指示詞の使用に「聞き手」が必須要素でなければ、「距離」が指示用法を決定づける要因であるといえる。従って、ese 系統の指示詞は [± Proximal] の言語的特質を持つため、[+ D] の言語的特質を持つということができる。

(26) の仮説を検証するために実証実験では (27) を調べる。

- (27) スペイン語の ese 系統の指示詞には「聞き手」の存在が必須要件である。

(27) の仮説の真偽は、「聞き手」の存在を排除した「独り言」の場面で検証することができる。独り言の場面で ese 系統の指示詞の使用が可能であれば、「聞き手」は ese 系統の指示詞の用法に必須の要素ではないといえ、(27) が偽であることが示される。「聞き手の存在」が必須要素でないのなら、「距離」がスペイン語のすべての指示詞の指示範囲を決定する要素となり、スペイン語の指示体系が「距離」に基づいた制約によりその指示範囲が決定されるということができる。

反対に、独り言の場面で ese 系統の指示詞の使用が無ければ「聞き手」が要因として働き、ese 系統の指示詞が用いられていると考えることができる。

4.2. 実証実験

本章では、(27) の仮説の真偽を検証するための実証実験と実験結果について述べる。実証実験は2種類行う。

4.2.1. 実験①

実験①では、聞き手がいない場面における、スペイン語ネイティブスピーカーによる、スペイン語の3系統の指示詞の使用について調べた。

話し手 (被験者) : スペイン語ネイティブスピーカー (A)

指示対象物 : 3つの青い椅子 (B)

実験場所 : 建物内の廊下

実験 :

廊下には、3つのイス (それぞれ B-1, B-2, B-3 と呼ぶ) を離して置く。B-1 は話し手が立つ場所 (手に触れる距離)、B-2 は手には届かないが少し離れた場所 (話し手から約3メートル)、B-3 はかなり離れた場所 (話し手から約9メートル) にそれぞれ置いた。

Aには事前にチェックシート(28)を渡し、Aは廊下に独りで立ち、廊下に置いてある3つの椅子を指示するときに、使用不可能な指示詞をチェックするように依頼した。

(28)

2023.8.5						
Marque ✓ las expresiones que NO se pueden utilizar en las situaciones dadas.						
①-1	¿De quién es...?					
B-1	<input type="checkbox"/>	esta silla	<input type="checkbox"/>	esa silla	<input type="checkbox"/>	aquella silla
B-2	<input type="checkbox"/>	esta silla	<input type="checkbox"/>	esa silla	<input type="checkbox"/>	aquella silla
B-3	<input type="checkbox"/>	esta silla	<input type="checkbox"/>	esa silla	<input type="checkbox"/>	aquella silla

実験①の結果は以下(29)の通りである。

(29)

2023.8.5

Marque ✓ las expresiones que **NO** se pueden utilizar en las situaciones dadas.

①-1 ¿De quién es...?

B-1		esta silla	✓	esa silla	✓	aquella silla
B-2	✓	esta silla		esa silla		aquella silla
B-3	✓	esta silla		esa silla		aquella silla

話し手が触れている B-1 の椅子の指示には este 系統の指示詞以外は使えない。一方で、話し手からの距離が離れている椅子 (B-2, B-3) の指示には、este 系統の指示詞は使用できず、ese 系統の指示詞か aquel 系統の指示詞を使用する。被験者 (A) は、B-3 の椅子の指示に ese 系統の指示詞が使えるかどうかの判断に迷いがあったが、使用は非文法的ではないと判断した。

4.2.2. 実験②

実験②では、2つの実験 (②-1、②-2) を行う。実験②では、聞き手がいない場面を設定し、指示対象物の視覚的認知によらない直示場面における ese 系統の指示詞の使用の有無を調べる。ese 系統の指示詞が [± Proximal][+D] である可能性が①の実験で示されたが、本実験はその可能性をさらに確かめるものである。

話し手 (被験者) : スペイン語ネイティブスピーカー (A)

実験者 : 音を立てる人 (B)

指示対象物 : 大きな音 (C)

実験場所 : 研究室、廊下

実験 :

被験者 (A) はひとりで研究室にいる (扉を閉める)。B は部屋の外から

大きな音 (C) を立てる。A には、独り言として自分に問う場合に使用不可能な指示詞を選択してもらい、(30) のチェックシート②-1 に記入する。

次に、A に廊下に出てもらう。扉の外にいる B に対して今の音が何かを聞いてもらう。その時に使用不可能な指示詞を (31) のチェックシート②-2 に記入する。

(30)

2023.8.5

Marque ✓ las expresiones que **NO** se pueden utilizar en las situaciones dadas.

②-1 ¿Qué es...?

C-1		este ruido		ese ruido		aquel ruido
-----	--	------------	--	-----------	--	-------------

(31)

2023.8.5

Marque ✓ las expresiones que **NO** se pueden utilizar en las situaciones dadas.

②-2 ¿Qué es...?

C-1		este ruido		ese ruido		aquel ruido
-----	--	------------	--	-----------	--	-------------

実験②-1、②-2 の結果は以下 (32) (33) のとおりである。

(32)

2023.8.5

Marque ✓ las expresiones que **NO** se pueden utilizar en las situaciones dadas.

②-1 ¿Qué es...?

C-1	✓	este ruido		ese ruido	✓	aquel ruido
-----	---	------------	--	-----------	---	-------------

(33)

2023.8.5

Marque ✓ las expresiones que **NO** se pueden utilizar en las situaciones dadas.

②-2 ¿Qué es...?

C-1	✓	este ruido	ese ruido	aquel ruido
-----	---	------------	-----------	-------------

②-1の実験では、ese 系統の指示詞のみが文法的であるという結果が出た。これは、同じ場面において、日本語で「この音なに (ko-NPs)」「あの音なに (a-NPs)」が文法的であること、また「その音なに (so-NPs)」が使用できないこととは対照的な結果である。②-2の実験では、este 系統の指示詞以外は使用可能であるという結果が出た。

4.3. 実験結果からの考察

実験①から得られた結果は以下のとおりである。

<実験結果>

- ・スペイン語の este 系統の指示詞は手の届く範囲、実際に触れることができる範囲の使用に限られる [+Proximal]。
- ・話し手の手の届かない範囲にある物を指すときは、ese 系統と aquel 系統の指示詞のどちらかが選択され、その選択は話し手による主観的な距離の認知にゆだねられる。
- ・日本語の so-NPs とは異なり、スペイン語の ese 系統の指示詞の使用は、聞き手の存在が無い場合でも現れる¹⁴。

14 被験者は実験①で、聞き手が B と C の椅子に座っていた場合は、距離にかかわらずどちらも esa silla で指し示すのが文法的であると述べている。ese 系統の指示詞は、基本的には距離を基準に使用されるが、「聞き手」のいる場面では、「聞き手」の存在を考慮し話し手の視点に影響を与えるようである。「話し手」よりも「聞き手」の領域にあると話し手が認知したものを指すときに ese 系統の指示詞が使用されるのは、日本語の so-NPs の使用場面と類似している。被験者は、ese 系統の指示詞が義務的に現れるのはこの状況であると言及した。

この実験では、スペイン語の3系統の指示詞の指示範囲を決定するのは「距離」によることが示された。従って、スペイン語の3つの指示詞は、基本的に[± Proximal]の言語的特質を持ち、スペイン語のese系統の指示詞は[+D]の言語的特質を持つとすることができる。

また、①の実験のB-3の椅子の指示詞として、被験者はaqueel系統の指示詞の指示範囲であるとしたが、ese系統の指示詞も非文法的ではないという判断をした。「距離」の認知は話者の主観により非文法的要因によって左右されるため、物理的距離は変わらなくても、eseもしくはaqueelの選択は恣意的に決定される。ただし、B-2ではeseもしくはaqueelの指示範囲にあるものを、esteの指示範囲まで引き寄せることはできない。日本語では、a-NPsの領域にあるものをko-NPsで指示することは様々な非文法的要因によって可能であるが、それはスペイン語では起こらないようである¹⁵。

Hoji et al. (2000:15)では、遠くにあるものを近くに引き寄せて捉えることは可能であるが、近くにある物を遠くに捉え直すことは難しいという心理的操作COP (condition on proximal construal)があることを指摘している。実験①B-3では、距離の認知が絶対的に「遠」であり、またB-2の椅子よりも相対的に「遠」にある椅子であっても「近」と「遠」の間を指すese系統の指示詞で指すことが不可能ではないことを示している。これはスペイン語のese系統とaqueel系統の指示詞の選択にCOPによる心理操作がある可能性を示唆している。

また、実験②の実験結果により、聞き手がいない場面でもスペイン語の

15 例えば、Hoji et al. (2003:10)では、映画「インディペンデンス・デイ」で現れるような、巨大な未確認飛行物体が空を覆う様子を見た主人公が、「これはどこから来たんだ。」と、遠くのものゝ ko-NPsで指し示すことが可能であり、また、広い草原にある一本の木が20メートル先に立っているのを見て「この/あの木は樫の木です。」と a-NPsでも ko-NPsでも指し示すことができることを述べているが、このどちらの状況においてもスペイン語ではeste系統の指示詞の使用はできないと被験者は筆者との会話で述べている。

ese 系統の指示詞が使用できることをより明らかにすることができた¹⁶。この結果は、スペイン語の ese 系統の指示詞は [+D] の指標を持つという仮説 (26) に対する更なる裏付けとなった。

5. 結論

本研究は、主に Hoji et al. (2003) による日本語の指示用法の理論研究を論拠とし、直示的談話場面におけるスペイン語の指示詞の言語的特質を示す実証実験を行い、その用法に理論的説明を与えることを試みたものである。

(34) は、先行研究による日本語の指示詞の体系と、本研究の実証実験で得られたスペイン語の直示用法の体系である。

(34)

スペイン語の指示詞

	±Proximal	±D
este	+Proximal	+D
ese	-Proximal	+D
aquel	-Proximal	+D

日本語の指示詞

	±Proximal	±D
ko-NPs	+Proximal	+D
so-NPs	-	-D
a-NPs	-Proximal	+D

(34) のパラダイムは、いわゆる近称と遠称の指示詞は、指示範囲の決定に両言語間において共通の指標に従っていることを示している。一方で、スペイン語の ese 系統の指示詞は [+D] の指標を持つので、[± Proximal] の言語的特質を持ち、日本語の指示詞とは異なる部分である。これが両言語間の指示詞の用法の違いであると結論付ける。

寺崎 (1999:85) は、「話し手の近くにあるものは este、聞き手の近くにあるものは ese、両者から遠いものは aquel 系統で指示される。」と述べているが、実証実験で示された通り、ese 系統の指示詞には必ずしも「聞

16 ②-1の実験で ese が選ばれたのは、音がした瞬間はすでに過ぎた後での発言であり、este の領域ではないため、話し手は時間的距離を基準に ese を選択した。②-2の結果は、②-1の実験よりもさらに時間的に後の発言であるため、ese および aquel も使用可能であったとした。

き手の存在」が必要ではない。これは、RAE-GDLE(p940-14.3.2.1.)や Real Academia Española(<https://www.rae.es/ese>) Diccionario de la lengua españolaが ese 系統の指示詞の用法に「聞き手 (interloctor)」の存在について触れていることに対しても同じことが言える。

また、寺崎 (1999:85) は、スペイン語の ese 系統と aquel 系統の分布と、日本語の so-NPs と a-NPs の分布との間にあるずれの主な原因として「ese の指示領域が日本語の「それ」よりも広いことである。」と述べているが、これは、日本語の so-NPs の指示詞の領域には「聞き手の存在」が不可欠であり、より聞き手に近いものを so-NPs で指し示すことから、so-NPs の指示領域は聞き手に近い範囲に限られるということであろう。

従って、本研究結果は、スペイン語の指示詞は基本的に「距離」を基準に指示する範囲を決めているという西村 (2014:46)、上田 (2017:106-107)、太田ほか (2000:4) の記述を支持するものである。

〈謝辞〉

本研究の遂行にあたり、指導教官として終始多大なご指導を賜った、神奈川大学外国語学部スペイン語学科教授 片岡喜代子先生に深謝致します。同学科教授 菊田和佳子先生、並びに同学科教授 Arturo Varón 先生には、本論文の作成にあたり、適切なお助言を賜りました。また、Arturo Varón 先生には被験者として快く協力をいただきました。ここに深謝の意を表します。最後になりますが、本研究の遂行にあたり多数引用させていただいた南カリフォルニア大学言語学部教授 傍士元先生には、多大なる敬意と感謝の意を表します。

参考文献

- Hoji, Hajime (1991) “KARE,” in C. Georgopoulos & R. Ishihara, eds., *Interdisciplinary Approaches to Language: Essays in Honor of S.-Y. Kuroda*, Kluwer Academic Publishers, pp.287-304.
- Hoji, Hajime, Satoshi Kinsui, Yukinori Takubo, & Ayumi Ueyama

- (2000) ‘On the “Demonstratives” in Japanese’, Seminar on Demonstratives, held at ATR (Advanced Telecommunications Research Institute International). November 29, 2000.”
- Hoji, Hajime, Satoshi Kinsui, Yukinori Takubo, & Ayumi Ueyama (2003) “Demonstratives in Modern Japanese,” In: A. Li, and A. Simpson (eds.), *Functional Structure(s), Form and Interpretation: Perspectives from East Asian Languages*. London: Curzon, pp.97-128.
- Bosque, Ignacio y Violeta Demonte(eds.) (1999), *Gramática Descriptiva de la Lengua Española*, 1, Madrid, Espasa Calpe.
- Takubo, Yukinori, (2019) “Nominal Deixis in Japanese ver0.99,” In: Wesley Jacobsen (Harvard U) and Takubo, Yukinori(eds.), *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*, NINJAL.
- Ueyama, Ayumi (1998) “Two Types of Dependency,” Doctoral dissertation, University of Southern California, distributed by GSIL publications, USC, Los Angeles.
- 上田博人 (2017) 『スペイン語文法ハンドブック』 研究社.
- 太田亨, 峯正志ほか12名 (2000) 「スペイン語を母語とする日本語学習者の指示空間認識に関する基礎的研究」 金沢大学留学生センター紀要 3号 1-21頁.
- 金水敏・田窪行則 (1992) 『指示詞』 日本語研究資料集 第1期第7巻 ひつじ書房.
- 黒田成幸 (2005) 『日本語からみた生成文法』 岩波書店.
- 田窪行則 (2010) 「第二部 談話管理と推論 第3章 談話管理の理論—対話における聞き手の知識領域の役割—」 『日本語の構造—推論と知識管理—』 くろしお出版.
- 寺崎英樹 (1999) 『スペイン語文法の構造』 大林書林.
- 松下大三郎 (1930) 『改撰標準日本文法』 勉誠社から復刊 (1978).
- 西川喬 (2014) 『わかるスペイン語文法』 同学社.

西村君代 (2014) 『中級スペイン語 読み解く文法』 白水社.

三好準之助 (2009) 「第 11 章 指示詞」『中級スペイン文法』山田善郎 (監修) 白水社.

Real Academia Española, Diccionario de la lengua española Edición del Trientenario Actualización 2022(オンライン) <https://www.rae.es/ese> (参照 2023.4.5)